



三輪田めぐみ、二年ぶり三度目のステップスギャラリー個展である。2015年に東京芸術大学大学院美術研究科修士課程油画専攻を修了し、同年、FACE展(損保ジャパポン日本興亜美術館)批評家展(本江邦夫推薦/ステップスギャラリー)などのグループ展に参加した。これからの本格的な活動が期待されるアーティストである。



三輪田は今回、大小織り交ぜた7点を出品した。これまでの三輪田の作品は西洋遠近法を追求し、見えることと見えないことの関連性から何かを引き出そうとしていたように感じる。例えば二人の人物が手を交差させているのだが、何かしら奇妙に見える作品、布を描き、布の下に何かか隠

されていることを予兆させるような作品を挙げることができよう。

今回、三輪田が出品した作品群も、この路線の探求を続けているのだが、やはり何かしらの変化が訪れているような気が私にはする。それは、これまで追求してきた「遠近法」と「見える、見えないの関係性」が、画面から食み出し、作品自体の「在り方」にも繋がっているように思えてならないのである。

それを「空間性」と言い換えてもいいのかもしれない。無論、作品一点一点が持つ力はあるのだが、画廊内に展示された作品群が持つ「間合い」から、私はそのように感じるのである。作品同士が互いに呼応して、息遣いを始める。この呼吸感は単発では成し得ず、複数であることに意味がある。複数といっても、重層的な騒音が画廊内に響き渡るのではない。互いを相克し、たった一つのリズムが発生されては消滅する、そのような空間性の均衡が保たれていたのがあった。次の三輪田の個展がどうなるのか楽しみだ。

